



中山道柏原宿をひもとく

山東町教育委員会

主任主査 桂田 峰男

《はじめに》

山東町は、滋賀県の東北部に位置し、伊吹・霊仙両山系の狭間という地理的環境から、古代より東国、西国、北国の諸国を望む交通の要衝として重要な位置を占めてきました。特に柏原近辺には古代官道である東山道とうさんどうが通り、古くは壬申の乱の激戦地「息長横川」を西に比定し、中世ちゆうせい後醍醐天皇の側近で鎌倉倒幕に参加したが途中捕えられ、この地で処刑された北畠具行きたばたけともゆきの宝篋印塔ほうきょういんとう（国史跡）も東山道沿いの峠に所在しています。また、“近江を制する者は天下を制す”といわれた戦国の世においても、多くの武将がこの道を駆け抜けて行きました。特に近世においては、中山道の宿場町として多くの旅人で賑わい、東西文化の交流が盛んに行われたことでしょう。

このように、山東町、特に柏原は道や街道を通した近江への文化導入の玄関口として、絶えず歴史の表舞台に立ち、多くの文化をもたらして来ました。今回は、中山道の宿場町として機能し、賑わった柏原宿をひもといてみましょう。

《柏原宿の概要》

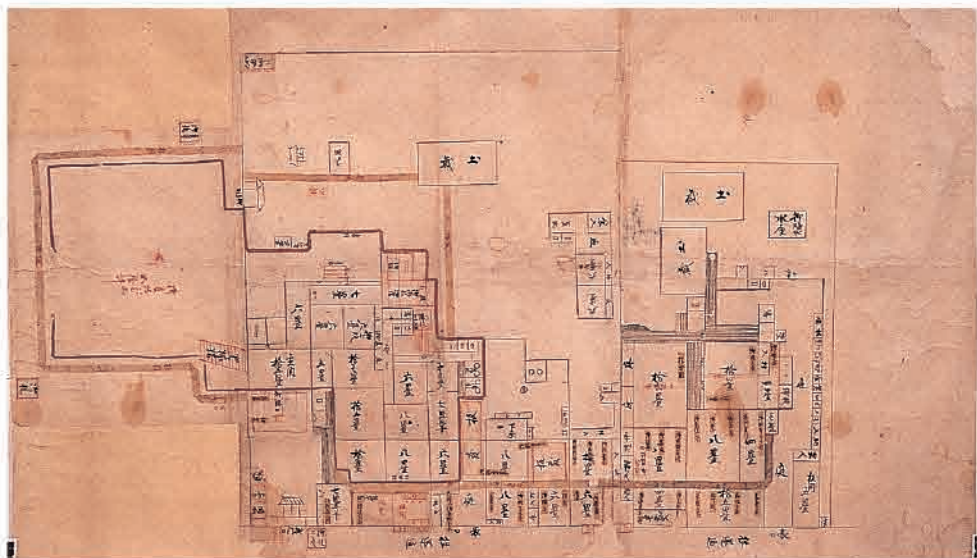
柏原村は鎌倉時代以降、近江の守護佐々木氏の流れを汲み、室町幕府を開いた足利尊氏の朋友で“バサラ大名”と呼ばれた道誉（高氏）などを輩した佐々木京極氏の領地で、京極氏の被官の箕浦氏が支配しておりました。その後、徳川幕府の直轄地となりますが、江戸時代中頃の享保9年（1724）には、大和郡

山藩（柳沢家）の領地となって明治維新に至りました。この柏原村が宿場として成立するのがいつのことなのか正確なところは不詳ですが、少なくとも慶長年間（1596～1625）頃には宿場として機能していたのではないかと考えられます。また、柏原宿の成立過程について、当地を支配していた箕浦氏の家臣団のうちで、柏原在住の者たちが武士の身分を離れ、宿場役人の中核として柏原宿を構築していったという研究があり注目されるようです。

柏原宿は中山道67宿の一つで江戸より60番目の宿場です。北の伊吹山系と南の霊仙山系に挟まれた地理的状況もあり、宿の長さは東西12町49間（約1.4km）と近江中山道8宿の中では1番長い宿です。宿場は13の集落で構成されていますが、そのうち西から仲井町、西町、今川、市場町、宿村、東町の7つの集落が街道に面していました。宿場の規模は、天保14年（1843）の『中山道宿村大概帳』によると、宿高2141石、家数344軒、人口1468人、本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠屋22軒とあり、中山道67宿のうち城下町の高崎宿・加納宿を別格とした65宿で6番目の宿高を誇ります。

《本陣・脇本陣》

江戸時代、参勤交代の諸大名、公家、幕府役人そして外国使節などが休泊するために、宿場に特別に設けられた施設が本陣・脇本陣です。柏原宿には、宿場のほぼ中央、市場川の東に本陣・脇本陣が各1軒ずつありました。



柏原宿本陣絵図（個人蔵）

現在、本陣・脇本陣とも、街道筋にその姿を留めていませんが、本陣は、南部辰右衛門家が代々勤め、約526坪の敷地と約138坪の建坪を有していました。本陣には江戸時代後期と思われる絵図が残っており、それを見ると、間口は26間で、街道に面して3つの門が開いています。建物は大名などが休泊する部分（左側）と南部氏が生活する部分（右側）で構成されています。大名が休泊する部分は、格式のある表門をくぐり、玄関に到ります。いくつかの部屋が連なるその奥に、床が一段高くなった上段の間があります。また、南部氏が生活する側は、表口を入り、通り土間を挟んで勝手や物置そして生活のための部屋が並んでいます。明治に入り明治天皇の行在所にもなりましたが、建物の一部や門は岐阜県垂井町や関ヶ原町などへそれぞれ移築され現存しています。

脇本陣は、南部源右衛門家が代々勤め、約228坪の敷地と約73坪の建坪を有していました。

〈柏原御茶屋御殿〉

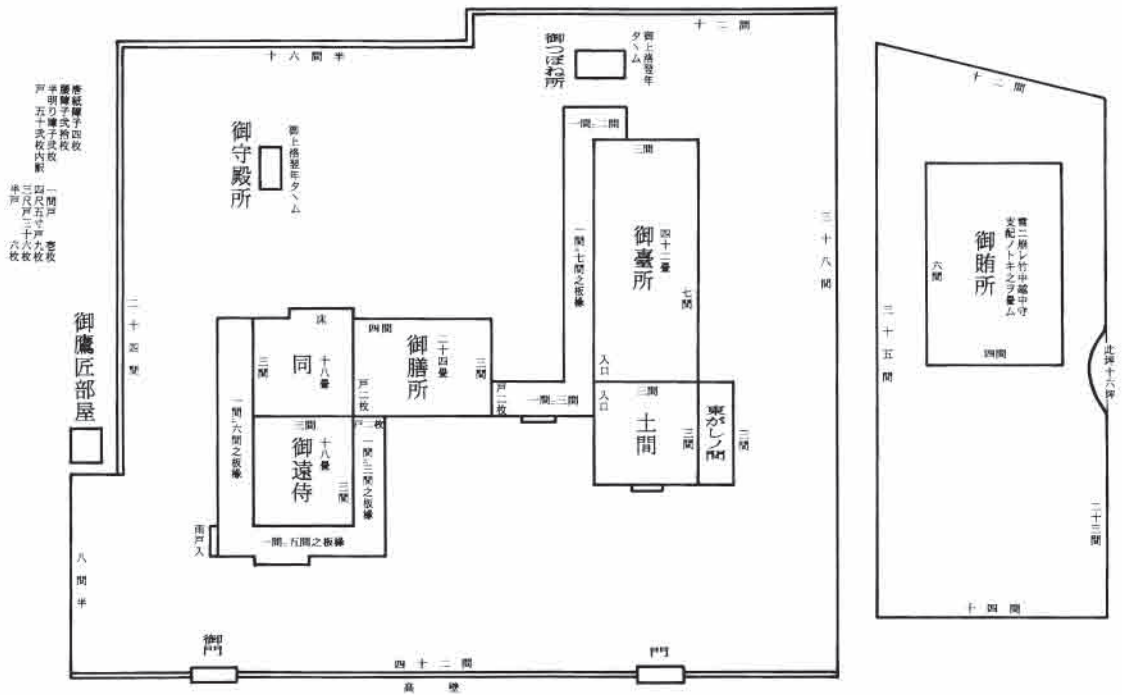
柏原宿の西に「御茶屋」という地名が残る所があります。かつてこの辺りに「柏原御茶

屋御殿」と呼ばれる建物が建っていました。江戸時代のはじめ、徳川家康・秀忠・家光3代にわたり、京都へ上洛するために東海道や中山道に設けられた将軍休泊の施設です。柏原には当初「御殿」はなく、在地の土豪西村勘介の家を利用していました。勘介の所有地の内西側の約1600坪を御殿用地として買い上げられ、元和9年（1623）3代将軍家光の時に御殿を建立しました。その後、徳川の権力が確立し上洛の必要がなくなり、元禄2年（1689）に解体されるまでの66年間、将軍休泊の施設として機能しました。柏原御茶屋御殿は、西村氏時代を含めて14回利用されました（家康8回、秀忠3回、家光3回）。

御殿が描かれている絵図などを見ると、かつての御殿は街道に面して瓦塀に連なる2つの門が開き、その間口は42間もありました。奥は竹矢来で三方を囲み、奥行きは38間を計



柏原御殿の墓股



柏原御殿之図 (中川屋三氏原図)

ります。屋敷内は唐破風の建物が建ち並んでいたようです。現在は当地にはその痕跡はなく、柏原御殿の裏門を移築したと伝えられる山門が近くの勝専寺しょうせんじに残っています。

將軍休泊の御殿は、近江には柏原御殿のほか、中山道沿いの永原御殿ながはら（野洲町）と東海道沿いの水口御殿（水口町）が設置されました。

《伊吹もぐさ》

柏原宿の北にそびえる秀峰“伊吹山”。この山は、古来より薬草の宝庫として知られ、数百種の薬草が生育しますが、中でもここで採れた良質のヨモギでつくった「伊吹もぐさ」は街道の名物でした。「初旅はもぐさも支度の数に入れ」と川柳にあるように、もぐさは旅の必需品であり、旅の土産物として重宝がられました。最盛期には10軒ほどの店が軒を並べていたようで、どの店も亀屋という屋号を名乗っていました。その中で特に有名

であったのが「亀屋七兵衛佐京」の店です。歌川広重が描く浮世絵「木曾街道六拾九次之内 柏原」は、その「亀屋七兵衛佐京」の店頭風景を描いたものです。現在も街道に面してひときわどっしりと落ち着いた佇まいを有し、「伊吹堂」の大きな看板を掲げて「伊吹もぐさいぶき本舗」としてただ1軒もぐさを販売しています。建物は山東町の文化財に指定されています。

「亀屋七兵衛佐京」を広重の浮世絵に描か



伊吹艾本舗

せるほど有名にしたのは、当家6代目七兵衛氏幸で、“コマーシャルソング”の元祖とも呼ばれています。七兵衛は行商で江戸へ下り、江戸でもぐさを売りさばいては吉原で遊興を重ね、その時、吉原の女性たちに「江州柏原伊吹山のふもと 亀屋佐京のきりもぐさ」と歌を歌わせてその名を広めました。また、伊吹艾という浄瑠璃を新作して大阪や京都で興行させました。こうした奇抜な宣伝方法によって財をなした七兵衛は、やがて浮世絵に描かれた邸宅に大改造し、広大な庭園を築いて旅人の話題を呼びました。

《萬留帳》

柏原には、^{まんじ}万治3年（1660）から昭和30年（1955）にいたる柏原のさまざまな出来事を記録した「^{よろずとめちよう}萬留帳」が残っています。この萬留帳は、全冊で66冊を数え、その内64冊は滋賀大学経済学部附属史料館に寄託されており、江戸時代のもの53冊、明治時代のもの11冊となっています。

この「萬留帳」には江戸末期の「^{かずのみやこう}和宮降嫁」の様子も知ることができます。文久元年（1861）10月24日、公武合体政策により^{こうめい}孝明天皇の妹であった和宮が14代将軍 ^{いえもち}徳川家茂に嫁ぐために江戸に向かう途中、この柏原の本陣に宿泊しています。総勢4千人余りの一行が4日間をかけて次々と宿泊して通過したのです。通過の際に、道路警備を大和郡山藩が、行列警備を彦根藩が担当し、^{すけごう}助郷と呼ばれる柏原宿に人や馬を出し宿場の運営を助ける村々から動員された人足は16000人、馬は1000疋にものぼったようです。また、「亀屋七兵衛佐京」の店では長持^{さお}3竿のもぐさが売り切れになるなどの大混乱ぶりをうかがい知ることができます。このように「萬留帳」は当時の柏原宿の姿を具体的に知ることができる貴重な史料といえます。

《おわりに》

多くの旅人たちで賑わいをみせた柏原宿も、明治という新たな時代を迎え、東海道線の開通など鉄道輸送にその主役を移し、宿駅としての機能も衰退していきました。時代は移り平成という時代を迎え、柏原に往時の宿場の賑わいを。地元の人たちのそんな思いが結集して、平成8年から毎年7月に「やいと祭」が催され、街道筋は人であふれます。

そんな「やいとの里」に平成10年4月、柏原宿歴史館がオープン。この施設は柏原宿の紹介と周辺史跡の情報館として旧家を改修したもので、施設ボランティア「ふれあい友の会」の強力なパワーにより柏原宿ゆかりの資料はたいへん豊富です（柏原御茶屋御殿の^{みつ}三葉^{ばあおい}葵の紋が入った^{かえるまた}褌^{かぶ}や^{かぶ}絵^{かぶ}図、^{しやう}萬留帳、^{しやう}正徳年号の^{こうさつ}大高札、もぐさ屋の看板など）。



柏原宿歴史館

また、宿場の面影を残すまちなみの保存と活用に向けた「まちなみ調査」も行われています。そして、まちなみ保存と共に柏原の名物のもぐさをはじめとした薬草や健康を取り入れた活動も動き始めています。

いま柏原は歴史を取り入れながら、キラリと光る柏原の将来像に向けて、確実に街道を歩みはじめています。

滋賀文化財教室シリーズ No.208号

発行年月日 2003年1月31日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大宮町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525